

○ 普及に移す技術

[タイトル] イネ紋枯病に対する薬剤散布適期

[要約]イネ紋枯病に対して、「てんたかく」では出穂 14 日前頃が、「コシヒカリ」では出穂 10 日前頃が、「てんこもり」では出穂 7 日前頃が各々薬剤散布適期である。これらの時期の薬剤 1 回散布で病勢の水平進展および上位進展を抑え、多発条件下でも防除効果が高い。

[キーワード]イネ紋枯病、てんたかく、てんこもり、コシヒカリ、薬剤散布適期

[担当場所・課]農業技術センター・農業試験場・病理昆虫課

[連絡先]電話 076-429-5249

[背景・ねらい]

近年の気象変動幅の増大や温暖化傾向および防除の不徹底等で、地域や品種によってはイネ紋枯病の発生が増加傾向にある。一方、殺虫・殺菌混合剤の散布による虫害重点対策で防除時期が遅くなっている地域も見られる。そこで本病に対する生育期の薬剤散布時期の違いによる防除効果を明らかにし、効率的な防除対策に資する。

[成果の内容・特徴]

1. 早生品種の「てんたかく」では、本病の被害度は出穂の 16 日前から 9 日前の薬剤散布で小さく、これより散布時期が遅くなるほど大きくなる（図 1-左）。
2. 晩生品種の「てんこもり」では、本病の被害度は出穂の 17 日前から 3 日前の散布では小さいが、出穂 22 日前の早期の薬剤散布では比較的大きい（図 1-右）。
3. 上記の両品種で、収量から薬剤散布による効果を見ると、「てんたかく」では出穂の 16 日前から 9 日前の散布が（図 2-左）、「てんこもり」では出穂の 11 日前から 3 日前の散布で高い（図 2-右）。
4. 中生品種の「コシヒカリ」の出穂 10 日前頃の薬剤散布では多発条件下でも高い防除効果が認められ、収量性では千粒重が確保されてくず米重率が低くなり、減収を抑えることができる（表 1）。

[成果の活用面・留意点]

1. 本病の常発地帯や各地域の防除指針に活用できる。
2. 本病の防除要否は従来どおり穂ばらみ期に判定する。

[具体的データ]

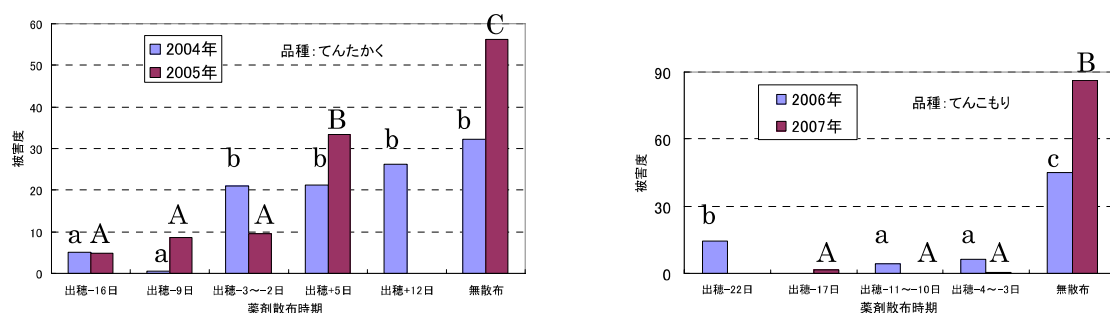


図1 てんたかくとてんこもりの薬剤散布時期と紋枯病被害度

(てんたかくではバリダシン液剤 5、てんこもりではアミスターエイトを 150ℓ /10a 相当量散布した。てんたかくの 2005 年の出穂+12 日、てんこもりの 2006 年の出穂-17 日及び 2007 年の出穂-22 日はいずれも試験未実施。同一の英文字間には Tukey 法で有意差がないことを示す。)

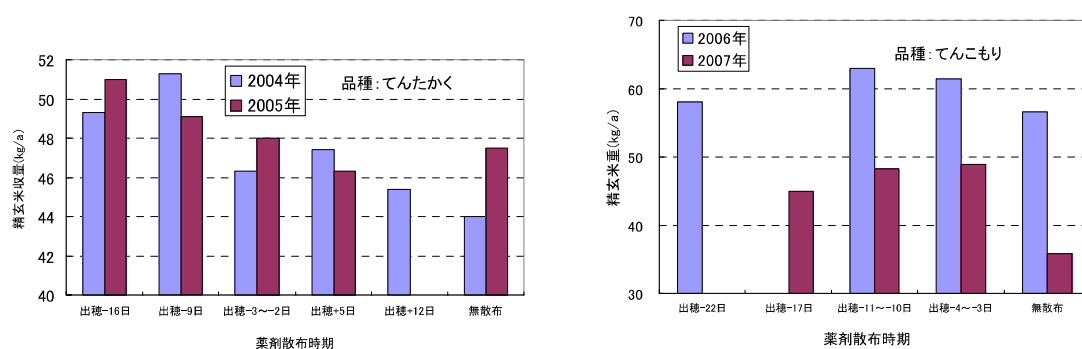


図2 てんたかくとてんこもりの紋枯病に対する薬剤散布時期と収量

(てんたかくの 2005 年の出穂+12 日、てんこもりの 2006 年の出穂-17 日及び 2007 年の出穂-22 日はいずれも試験未実施。本田移植はてんたかくでは 2004 年は 5 月 10 日に、2005 年は 5 月 12 日に、てんこもりでは 2006 年は 5 月 8 日に、2007 年は 5 月 10 日に行った。精玄米重は粒厚 1.90mm 以上。)

表1 コシヒカリにおける紋枯病に対する出穂10日前頃の薬剤散布と防除効果および収量性

試験年次	薬剤の散布時期 及び有無	発病程度と防除効果				収量性		
		発病 茎率(%)	病斑 高率(%)	被害度	防除価	精玄米重 (kg/a)	くず米重 率(%)	千粒重 (g)
2006	出穂11日前散布	6.8	20.1	0.0	99.9	59.4	5.2	22.5
	無散布	92.8	65.6	71.4	—	54.5	9.3	22.0
2007	出穂12日前散布	5.5	30.7	0	100	43.1	6.4	22.1
	無散布	43.0	46.7	18.5	—	42.6	7.5	21.9

注 1)移植は2006年が5月8日に、2007年が5月10日に行った。
2)2006年は6月29日、2007年は6月27日に本病菌のフスマ・籾殻培養菌を接種した。
3)薬剤はアミスター液剤を150L/10a相当量を散布した。
4)精玄米重は1.90mm以上で、くず米重はそれ以下。

[その他]

研究課題名：暖地性病害虫による米の品質低下の解明と防止対策

予算区分：県単

研究期間：2007年度(2003～2007年度)

研究担当者：向畠博行、三室元気、関原順子、坂田清華

発表論文等：向畠ら(2006)北陸病害虫研究会報第55号：46